

納得感とは何か—主体的学びを後押しする心理学的概念を探る

研究期間 平成 28 年度

研究代表者名 橋本優花里

I はじめに

自ら学ぶ意欲を持った学生が大学に入学してきた時代は去り、少子化に伴い、学力も意欲も多岐にわたる学生が入学するようになった。そのような中で、大学では今、多様な学生の学びを支えつつ、生涯主体的に学び考える人材を育成し、その教育成果が見える形で発信することが喫緊の課題となっている。

では、学生の主体的な学びを後押しするものは何であろうか。申請者が研究分担者として参加した平成 21 年から 23 年の科学研究費基盤研究 B では、学生の主体的な学習意欲の度合いを決定する学習者の心理的概念として、納得感を見出した。これは、教員や仲間、あるいは様々な他者とのやり取りの中で、学習の場や自身の状況を適切に意味づけ、納得していく過程を指し（山地，2012）、有用感、充実感、達成感、向上感、効力感などの多様な心理的感覚を包含する（橋本・川越，2012）。そして、橋本・川越（2012）によれば、納得感は授業を通じて高まっていくものであり、その向上に伴い学生の主体的な参加が促される。しかしながら、この研究においては、実践からの経験に基づき納得感の特性を探索的にまとめたただけであったため、それをどのように評価するのか、そしてそれが授業を通じてどのように培われていくのかは明らかにされていない。

これまでの研究から主体的な学習を下支えするものとして、動機づけの存在が指摘されている。動機づけの研究は国内外で多くなされているものの、納得感については、欧米では類似の用語は存在せず、極めて日本的な概念であると言える（山地，2012）。また、動機づけは課題達成への期待やその価値の認知といった側面を強調するが、納得感はいずれを含みつつも、対人文脈における相互作用を重視している。したがって、現時点では、納得感は教育場面において極めて新しい概念であると言えるが、それを評価できるようになり、動機づけとの関連性を検討することができれば、その位置づけも明らかになると考えられる。また、従来の授業評価研究では授業に対する満足感の高さが授業理解度に影響を与えることも示されているが（長谷川・原田，2007）、納得感と満足感の違いは明らかになっていない。

そこで、本研究では、納得感を測定する心理的尺度を開発するために、まず、納得感という言葉に対する学生の理解を明らかにするとともに、満足感と納得感の同異についてのとらえ方を把握し、納得感の構成概念を再考することを目的とした。

II 方法

1. 調査対象 A 県の国公立大学 3 校の 1～3 年生 92 名とし、授業時間内で調査を行った。
2. 調査方法 1) 学んだことに満足するのはどのような時であるのか、2) 学んだことに納得するのはどのような時であるのか、3) 学んだことに対する満足感と納得感は同じか否か、およびその理由、4) もっと学びたい授業とはどんな授業かの 4 点について、自由記述を求めた。

III 結果

1. 満足感と納得感の同異

上述の 3) の項目により、満足感と納得感の同異について尋ねた結果、21% (N=19) が同じと答えており、79% (N=72) が違うと答えた。「似ている」「ほぼ同じ」とした回答は同じに含め、「少し違う」という回答は違うに含めた。なお、「同じであったり、違ったりする」という回答をした者が 1 名いた。

2. 満足感とは

上述の 1) の項目について得られた結果について、KJ 法により整理、分類した。その結果、「テストの成績が良かった時」、「学んだことが日常生活で活かされた時」という回答が多くみられた。

3. 納得感とは

満足感と同様に分類を行った結果、「内容が理解できた時」、「学んだことが体験と重なった時」という回答が多くみられた。また、満足感に対する回答では得られなかった「根拠がある説明を受けた時」という回答があった一方で、満足感で多くみられた「テストの成績が良かった時」という回答はわずかであった。

IV 考察

本研究では、学生の主体的な学びを支える心理的概念として納得感を取り上げた。納得感については、「はじめに」で述べたように、欧米ではそれに類する用語はなく、日本的な概念であることが指摘されている。既報では、納得感の構成概念は、長年の教育実践から見出されたものを探索的にまとめた段階でとどまり、それをどのように評価するのか、そしてそれが授業を通じてどのように培われていくのかは明らかにされていない。そこで本研究では、自由記述により納得感や満足感のとらえ方を明らかにし、その構成概念を再考するとともに、評価方法の開発につなげることを目的とした。

まず、従来の授業評価でよく問われている満足感と納得感の同異について尋ねた結果、多くの学生が二者を異なるものとしてとらえていることが明らかになった。また、満足感と納得感がそれぞれどういう時に得られるかについて尋ねた自由記述をカテゴ

リ一分けした結果、満足感は、テストの結果に反映されたときや学んだことが日常生活に役立った時など、自身のアウトプットが有効であった時に得られる感覚としてとらえられていることが示された。一方、納得感は、内容が理解できた時や学んだことが体験と重なった時など、自身のインプットとのかかわりの中で生まれる感覚であることが示唆された。このような納得感のとらえ方は、納得感が教員や仲間、あるいは様々な他者とのやり取りの中で生まれるとし、有用感、充実感、向上感、達成感、効力感などの多様な心理的感覚を包含するとした山地（2012）や橋本・川越（2012）の考え方とは少し異なっている。

今後は、これまで考えられていた納得感と本研究で得られた内容の違いを得られた内容をさらに詳細に検討するとともに、納得感を評価するための項目を作成して質問紙の開発につなげていくことが課題である。また、学びたい授業についての自由記述を整理し、納得感と動機づけの関連性について明らかにしていきたい。

VII 引用文献

- 長谷川勝久・原田由香里（2007）. 教育系大学の学生を対象とした授業満足度アンケート項目の開発 日本教育工学論文誌, 30, 447-452.
- 橋本健夫・川越明日香（2012）. 納得感を高める授業プロセス 山地弘起・橋本健夫（編著）学生の納得感を高める授業（pp.25-46）ナカニシヤ出版,
- 山地弘起（2012）. まえがき 山地弘起・橋本健夫（編著）学生の納得感を高める授業（pp.25-46）ナカニシヤ出版,